

現代日本
文學全集

49

戰爭文學集



戰爭文學集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和三年十二月二十日印刷
昭和四年一月一日發行

現代日本文學全集 第四十九篇

著者 櫻井忠溫
著者 水野廣德

發行者 山本美

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ二二

發兌

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

改造社

振替東京八四〇
電話芝(43) 二二二二
番番番番番番番番番番

序 詞

或る國土に棲む人々にあつて、國土を愛慕しないわけはない。それが愛國心である。けれども愛國主義がまことに自覺されて來たのは、きはめて近代である。委しく云へば、イタリイの獨立以後である。國家の對立といふ形式が、はつきり國民に認められて來てからである。國家意識が芽生え、國家の對抗意識が尖鋭化されて來るとともに、國家の存亡を賭けるところの、戦争もまた一層眞剣になる。わが國において、戦争文學と呼ぶべきものが古くから無いとは云はない。——たとひ、それは大部分歴史の挿話としての「軍記」としてであつたにしても——。けれども、颯爽として近代國家意識の尖端を、それだけ息づまるやうな國民感情を、初めて一字の微にすらも満したものは、櫻井忠溫氏の「肉弾」、「銃後」、水野廣徳氏の「此一戦」の出現を待たねばならなかつた。明治三十七八年の日露戦争は、日本あつて以來、日本國民の持つ純眞な國家意識が、戦争を通じて、初めて最も潑刺に、最も熱烈に、電光ニュースの如く、世界の大空に描き出されたものであり、二氏の戦争文學は、明らかにその鮮明な電光線の役目をつ

とめたものである。明治三十七八年の日露戦争から、日露戦争役までにかけて、わが國にも無數の戦争小説は現はれた。けれどもこれは一つの小説に過ぎない。現實の戦線と戦士の血みどろな愛國心を捉へて、こんなに國民の胸を撲ち、こんなに力強く、心臓を鼓動せしめる戦争文學は、二氏を俟つて初めて、國民の當面に提供されたのであつた。

第二に、近代戦争の機構や内容は、この三部の戦争文學において、初めて日本文壇に、いな、文壇のみならず、一般國民の前に、霧が晴れたやうに、精確に傳へられるのであつた。これは二氏が實戦の第一線上に立つたといふ好位置にあつたからばかりでない、二氏の奥深い専門知識と、一つ處に立ちながら、いつも全體の展望を見失はない洞察力とは、遺憾なく戦線の全貌を何人の前にも展開して呉れる。これは誰にでも望めることではない。日露戦争は、いな近代戦争の纖維は、二氏を得ることによつて、初めて絶好な記録者を見つけ出したのである。この三著は、出版後一千万以上を重ねた。どこがそんな國民からの需要であつたかは、以上の理由にもあるのであるが、もう一つ、どう

しても、取り落せない一つの要因がある。それは主に二氏の、敘述の迫力によるものである。たとひ前の二つの要素があつたにしても、この第三因を缺いたならば、かゝる空前な、國民の感激を呼び起すことが出来ないであらう。と云つても、二氏の技巧や敘述の巧みさは、同じ惚れ惚れする巧みさであつても、全然違つて居る。水野氏の「此一戦」が、整然たる、事詩であるならば、櫻井氏の「肉弾」、「銃後」は、情熱と血とで描いた一大敘情詩である。云ふまでもなく、文學は感情の高潮を捉へるものである。國家に對する信念や、生死の斷崖に立つた刹那ほど、人類を眞剣にし、それだけ最高度に感情を昂揚させるものはない。二氏の羨ましいほど自由な筆路が、この刹那々々を巧みにスナップして、息づるしいほどの實感を讀者に刺激する迫力において、まことに驚嘆に値ひする。眞實の経験ほど、卓逸した藝術美を作るものがないといふ教訓は、此の三部を讀んで、今更に痛感されるのである。まして二氏のやうな藝術素の豊富な人々にあつて。……恐らくこの三部は戦争記録として、戦争文學として、世界的に不朽な價值を持つであらう。

銃肉
後彈

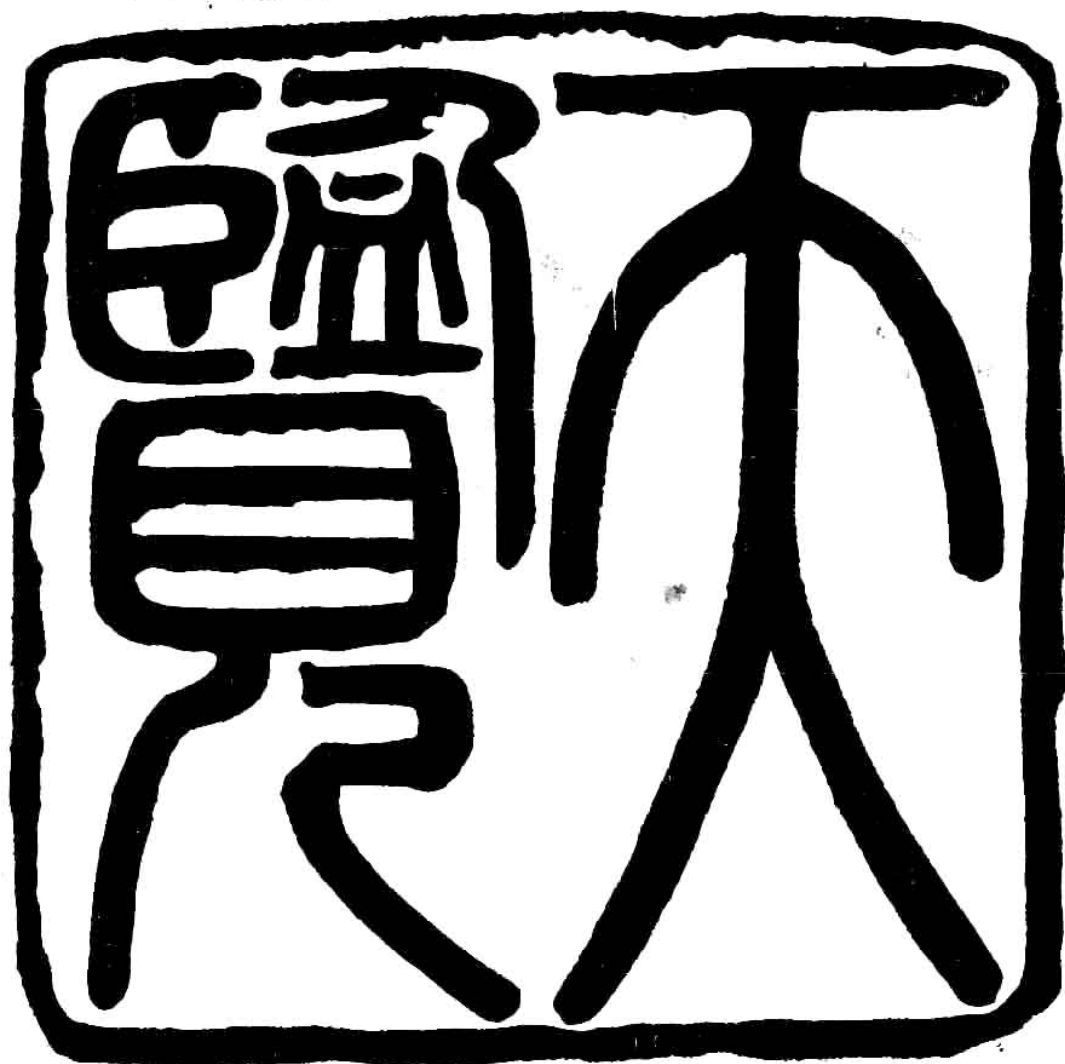
櫻井忠温

肉體に統制は、
 日の望の記録は、
 多小を、
 世子送る、
 の上、
 著、
 が、
 手、

忠溫

肉にく

彈だん



卑著「肉彈」は侍從武官長男爵岡澤精閣下を
經て

天闕に達し、乙夜の覽を辱うす。光榮既に予の
身に過きたり。然るに又た
皇恩の隆渥なる、特に拜謁を賜はり、微賤にし
て

龍顏に咫尺し奉る。予、仰感俯愧、復た言ふ所
を知らざるなり。

明治三十九年六月二十五日

櫻井忠溫

恭しく 此書を獻して

陣歿戦友の忠魂を慰す





明治三十七年、秋、空海居士、世
林親、上社、果、心、を、活、居、る、我
等、の、故、順、に、お、慰、撫、井、中、尉
躬、當、に、御、叙、し、記、し、了
得、悉、状、以、宛、目、一、函、に、お
見、忠、告、を、お、言、い、し、了、平、一、に
當、後、人、を、お、お、い、し、了、也
因、る、事、あり、以、矢、に、お、言、い
し、了、三、月、上、山、山、院



土居 玄



壯烈

贈

梅井中尉

希典

簡書下閣トルヴェスール領統大國米

The White House:
Washington

April 22, 1908.

My dear Lieutenant Sakurai:

I wish to thank you for the two very beautiful copies of "Human Bullets," one in Japanese and one in English, which I have just received through the courtesy of Count Okuma. I already have a copy, which I have read not only with interest but with high admiration. I shall keep this copy always in my library. I have already read portions of the book to my two elder sons, for I feel that the knowledge of the deeds of wonderful heroism so graphically told by you should be an inspiration to every young man who may ever have to serve his country in battle. I wish to thank you, and at the same time to express my profound admiration for the army and navy of Japan.

With great regard, and renewed thanks, believe me,

Sincerely Yours,

Theodore Roosevelt

*Lieutenant Sakurai,
Tokyo, Japan.*

譯 文

大隈伯爵の厚意により寄贈せられたる美装の和英文「肉彈」各々一部正に接
せり。予は既に一部を藏し、興味に加ふるに多大なる驚歎の念を以て通讀し
たり。予は此書を我家の書籍室に珍藏せん。予は既に此書の數章を我が二長
兒に讀み聞かせたるが、貴下の實狀目睹するか如くに描寫せる驚絶すべき英
雄的行爲を學ぶは、一朝有事の時に際して、我國家の爲に奉公すべき義務あ
る一般青年の精神を鼓舞すべきものたるを感す。予は貴下に感謝し、併せて
日本陸海軍に對し深厚なる驚歎の情を表す。貴下に敬意を表し、重ねて感謝
の念を致す。

千九百八年四月二十二日

貴下の誠實なる

セオドル、ルースヴェルト

於大統領官邸

櫻井中尉殿

近頃露國の退役將校で、ルッス新聞の通信員たるガーフィールド氏が來訪した。彼れは日露の釁端を開いた當時、哈爾濱に在つて通信に従事して居たか、聽て召集せられて旅順へ向つた。然るに最早其の時は我が軍の爲に通路を絶たれたので、更に浦鹽へ向けられた者である。此の人の話に、露都から來る汽車の中には、夥多の勳章賞金等を積載してあつて、同車に充滿せる將卒等は、意氣甚だ軒昂、文明の露軍は必ずや半開の日軍を粉碎して、彼の燦たる勳章を佩ひ、爛たる黄金を懷にするのであると、宛ら既に戰勝ちて凱旋門に入る者の如くて、虎穴に入り死地を踏むの疑懼を抱いてゐ無かつたことを實見したか、日本軍は全く之に反して、男兒一度死を決して陣に臨む、復た曷ぞ生還を期せんやとの意氣で、君國の爲、鼎鑊に甘んじ、犠牲たるを覺悟して驀然奮進した。なほ又た露軍は上下の一致和合を缺き、將は驕り、兵は倦み、將校は富み、兵卒は飢うるの有様で、従つて彼等の間は犬猿も啻ならずとのことである。然るに日本軍は軍紀の嚴正なるに加へて、戰友相互に父子骨肉の如くに親密である。此れに由つて見るに、日露兩軍が勝敗の數は未だ干戈を交へざるに已に業に決してゐたのであると、ガーフィールド氏は斯く語つた。蓋し氏の説は肯綮に中つたものと云ふへしてある。

そもそも我が國の軍隊は軍紀嚴肅にして、上下融睦し、以つて君國に奉せんことを競ひて、獻身犠牲の精神が大いに發動してゐる。是れが大和民族の本領である。而して此の壯美なる精神の最も盛んに發揮せられたのは、即ち旅順の攻撃である。物質的に打算したならば、此の攻圍軍の損害は随分多大であるか、然し乍ら又た之れが爲に反映した精神的活動の方面から云つたならば、其の利益は莫大なるものであつて、確かに我が大和民族の歴史に一大光榮を添へてゐる。下級の兵卒に至る迄か、死